

平成28年度



のじぎく文芸賞

2016 Literary Works



公益財団法人兵庫県人権啓発協会設立25周年記念
兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会

The background of the entire page is a repeating pattern of white flowers and stems on a gray background. The flowers are small, five-petaled, and arranged in clusters along thin, branching stems. The pattern is dense and covers the entire area.

最
優
秀
賞

《最優秀賞》

詩部門

輝け

内藤 廉哉

目覚まし時計が鳴った
目を開けると見慣れた景色がいつもと違って
見えた
薄い霧がかかっているようだ
体が重い
食欲がない
無理に口に押し込んでみたら
なぜか何の味もなかった
その日から勉強も部活もやる気が出ない
大好きな読書もどこを読んでいるかわからな
くなる

ぼくはどうしてしまったんだろう
いつもの自分ではない
笑うことができない
いつも楽しいと思っていたことが全く楽しく
ない

ふとほたるを見なくなった
家の近くの川沿いを歩いた
暗闇の中に小さな光が一つ二つ
いつのまにか小さな光に囲まれてたらずん
でいた
光は輝いている
命の輝きだ
ほたるの小さな命の輝きとともに
ぼくの命も輝きだした
無性に走りたくなった
川沿いを走るぼくの額に汗がにじむ
目覚まし時計が鳴った
目を開けると見慣れた景色がいつもより輝い

て見える

体が軽い

朝食を勢いよく口に放り込み

「いってきます」

と大声をかけ学校へ走っていった





優
秀
賞

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

小説部門

いま、伝えたいことがある。

織田 香音

1

あやちゃんがかっこいい。かしこくて、美人で、運動もできて……。それに、思った事をはっきり言える。男子にも負けない。私はあやちゃんとは正反対で、勉強ができるわけでもないし、顔も普通だし、とろいうえに思ったことが素直に言えない。

あやちゃんと出会ったのは、幼稚園の頃だった。年長組のときに引越してきた私は、男の子からいじめられていた。

「じゃま！ おまえ、とろいんだよ！ あっちいってろ、ばか！」

そう言っつて男の子は殴つてきた。

「や、やめて。いたいよ……」

抵抗にもなつていなかった。

「やめなよ！」

さっそうと現れたヒーロー。それがあやちゃんだった。

「こいつがとろいのがわるいんだろ！」

「ひとのせいにして、ばかはおまえだ！」

そして始まる乱闘。あやちゃんのほうが優勢だったが、ほかの子が知らせたのか、二人は飛んできた先生に止められてしまった。先生に叱られているあいだも、あやちゃんは堂々としていた。そんなあやちゃんが、私は輝いて見えた。

それから私たちは、ずっと一緒だった。小さな町の小さな学校に通っていたから、クラスが離れることもなかった。いつしか、お互いにかげがえのない親友だと認めあつてい

た。

2

「んんー。あ、朝か」

あやちゃんと出会ったころの夢をみていた。とても懐かしい記憶だ。

「今何時…って、ええ!？」

枕もとのデジタル時計がうつす時刻は、七時半。アナログならまだしも、デジタル時計で見間違えることなんて、そうそうない。

「ちょ、ママ！　なんで起こしてくれなかったの？」

急いでランドセルを引っかけて、リビングへ下りる。

「だってあんた、何回言っても返事しかしなかったじゃない。自業自得よ」

どうせ遅くまで起きてたんでしょ、とすました顔で言うママ。反論したいけどそんなことをしている時間はない。パンを口につこんで家を飛び出した。

キーンコーンコーン。着席のチャイムがなった。必死で席にすべりこむ。

「あ、ひな。遅かったじゃん。まさか寝坊でもした？」

あやちゃんが振り返って、いたずらっぽく言った。

「あはは。そのまさかなんだよねえ……」
私は力なく笑う。

「もー、ひなは仕方ないなあ。中学生になったらどうするのよ。ほんと、あたしがいないとだめなんだから、もつと……」

あやちゃんが言い終わる前に、ガラガラと前のドアが開いた。

「はい、朝の会始めますよー。西本さん、おしゃべりは休み時間にしてくださいね」

担任の先生が黒板の前に立つ。

「じゃあ、日番の人、あいさつお願いします」
「起立。朝のあいさつをします。おはようございます」

「おはようございます」

礼をしたとき、あやちゃんがやっちゃった
と言うように舌をペロツとだした。

3

「ひな、帰ろ！」

帰りのあいさつが終わったとたん、あや
ちゃんがかけよってきた。

「うん、ちよつと待ってて。絵の具セットと
か持って帰るから」

「へえー、まじめだね。あたしはテキストに
終わらせちゃったよ」

今日は、図工で描いた絵を家に持って帰っ
て仕上げるつもりだ。

「絵描くの、好きだから」

「すごいなあ。あたし、これが好き！ っ
ものがないからさ、うらやましい」

あやちゃんはそう言うけど、私だつてあや
ちゃんがうらやましい。

「はい、準備オツケー」

「よーし！じゃあ、帰ろー帰ろー！」

能天気なあやちゃんの後について、教室を
でた。

いつもの交差点で

「ランドセル置いたら東町公園集合ねー。み
うとかおりも来る予定だから」

「はーい。じゃあ、あとでね」
と言って別れた。

(お菓子と、ペンケースと、ノートと：)
持っていくものを思い浮かべながら、家
に入る。今日は、なにをして遊ぼうかな。

(早くいこつと)

公園に着くと、みうちちゃんとかおりちゃん
がブランコに乗っていた。

「あ、ひなー やっほー」

「あやちゃんは？」

「まだ来てない」

めずらしいな。あやちゃん、遊ぶときはい
つも一番にいるのに。

「ねえ、あやが来るまで暇だからさ、ちょっとイタズラしない？」

突然、みうちちゃんがニヤニヤしながら言った。

「イタズラって、なにをするの？ あんまりひどいことはやめといたほうがいいよ」

そういうかおりちゃんも顔は笑っている。

「そうだなあ……。ピンポンダツシユとか？」

「や、やめとこうよ、そんなこと。後で先生に怒られるかもしれないし。その前に、あやちゃんが怒るよ」

止めようとしたが、それが余計に二人の気になさわったようだ。

「ああ、あや？ あの子、ちょっと調子乗ってるよね。いつも良い子ちゃんぶってさ」

「分かるー。思ったことすぐ言うし。空気よめつつの」

思わぬ反応に、動揺する。

「え？ みうちちゃんもかおりちゃんも、どう

したの？ あやちゃんと仲良かったんじゃないの？」

なんなのだろう、この空気は。

「誰があんな子と仲良くするの？ みんなに嫌われてるよ？ 気づいてなかったんだ？」

「でもさ、正直ひなもそう思ってたんじゃないの？ あやが調子乗ってるって」

「そんなこと……」

ハツとして二人の顔を見る。ここで逆らったら明日からどんなあつかいを受けるかは、火を見るよりも明らかだ。

「う、うん……。そうだね……」

自分が、情けないと思った。本当はそんなこと、全く思っていないのに。

「ひな……」

突然名前を呼ばれて声のした方をむくと、そこにはあやちゃんが立っていた。

「あ、あやちゃん……」

「それ、本当……」

言われてから、自分のしたことの重大さに

気づいた。

「ちっ、違うの！ これは……」

「そうらしいよ。ひな、いつも一緒にいたくせに、あやのこと嫌いなんだって」

勝手に、みうちゃんが言ってしまう。

「あやちゃん、ちが……」

「言い訳なんか聞きたくない！」

強い言葉に、私は黙ってしまう。あやちゃんは公園を出て行く。その背中を追いかけることが、怖い。

「卑怯だね、あんた」

あやちゃんがつぶやいた言葉は、私の胸に深く突き刺さった。

（私が傷つく資格なんて、ないのに）

そうだ。私よりもあやちゃんのほうが、ずっと傷ついているはずなのに。泣きたいのに、涙が出てこなかった。

（昔はすぐに謝ってたのにな……）

今は、その背中を追いかけることさえ、できない。

「あーあ、行っちゃったー」

かおりちゃんが他人事のように言った。私の中で、何かかぶつんぐと音をたてた。

「帰る」

それでも二人に強く言えない私は、あやちゃんの言う通り卑怯だと思った。

夕食のとき、どうしても食欲がわかない私をママは心配したが、「ごちそうさま」とだけ言って部屋に上がった。

『卑怯だね』

あやちゃんの言葉が頭のなかで、ぐるぐる回る。卑怯だね、卑怯だね、卑怯だね卑怯だね卑怯だね卑怯だね卑怯だね卑怯卑怯卑怯卑怯卑怯ひきょうひきょうヒキョウヒキョウヒキョウ……。

（もしかしたら、今までずっとそう思ってたのかな）

思い出せば、守ってもらえばかりで、私は

あやちゃんになにもしてあげられていない。どす黒い気持ちだが、心の中を流れる。

「あやちゃん、私のこと嫌いになったよね」

言葉はむなしく響き、なぜか悲しい。

そのまま、眠りについてしまった。

4

翌朝。起き上がろうとしたら、頭がガンガンして、気分が悪かった。熱を測ってもらうと、三十七度五分あった。

「学校に休みますって連絡しとくね」

ママの言葉を聞いて少しほっとしてしまっただ。本当に痛いのは頭じゃなくて、心だった。

5

熱も下がりが、翌日には体調ももとに戻っていた。ガラガラッ。教室に入るとなにか違和感が

あった。
（あやちゃんの周りに人がいない…）

いつも人気者で常に人の輪のまんなかにいるあやちゃんは、どこか暗い表情をしていた。〈無視〉の二文字が浮かんだが、話しかけられる勇氣もない私は、できるだけ気にしないようにした。

決定的な出来事は、お昼休みに起こった。

「ねえ、次って教室どこ？」

移動教室の場所を聞いたのだろう、あやちゃんがとなりの席の子に話しかけた。

（理科室だっけ）

心の中でつぶやくも、口に出されはしなかった。その子が答えるだろうから。

「あ、ゆいー！この前のさ…」

その子はさっさと席を立て、ほかの子のところに行く。後ろで、クスクスと笑い声が出た。

（みうちゃん、かおりちゃん……）

私がない間に、なにがあったのだろう。

「あやちゃ……」

「ひなー行こっ！」

話しかけようとしたら、みうちゃんが強引にうでを組んできた。

「え、でも……」

「嫌いなんでしょ？」

主語がなくても分かる。あやちゃんのことだ。みうちゃんの目は、余計なことをすると語っていた。

(なんで、そんなことするの)

やっぱり口には出せない。こんな弱い自分は、あやちゃんのとりにいる資格がない……。理科室に行きながら、また泣きそうになった。

それからあやちゃんは本格的にいじめられるようになった。説明しなくとも、典型的ないじめといえ、想像がつかうのではないか。主にいろいろとやっていたのはみうちゃんとかおりちゃんだったが、ほかの女子たちも二人には逆らえず、徹底的に無視していた。

それから二週間くらいたったころ、一人の男子が声をかけてきた。

「井上。ちよつといいか」

「？」

お字まりようた

東遼太。私があやちゃんと出会ったときにあやちゃんと殴り合いをした男の子だ。ついて行くと、人気のない廊下の端で東くんは止まった。

「あのさ……。俺の思い違いだったら言っただけ……。ほしいんだけど……」

真剣な表情の東くん。

「西本、いじめられてる？」

「今さら？」

思わず言ってしまった。

「二週間くらい続いているのに気づかなかったの？」

「まあ、そうだけど……。てかお前、そんな当たり前みたいに言うなよ。親友がいじめられてるんだぞ？助けたいとか思わないのか？」

どうしてか、無性に腹が立った。

「別に。私には関係ないよ」

その瞬間、東くんの顔が引きつったのが

はつきりと見えた。

「お前……！　今まで西本がどれだけお前を助けたか、忘れたのかよ！」

いきなり肩をつかまれ、体がふるえた。

「いたっ！」

「わっ悪い。……お前、本当によく考えろよ。いざれ後悔することになるぞ」

上から目線で言われるのはしゃくにさわるけど、東くんが言っていることは正しい。

（私だって、今の私は嫌いだよ）

分かっている。分かっているんだ。東くんはきつと暗い表情をしているだろう。私は視線を合わせる勇気もなく、背をむけた。

次第に歩調が速くなる。ほんと、東くんは余計なことをしてくれたね。でも……

（ありがとう、東くん）

やっと目の前の霧が晴れたような気がした。

6

教室に戻ると、すぐに授業だった。私はあやちゃんと話をしようと思ったが、授業をさぼれるわけもなかったのでおとなしく席に着いた。

やっと授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。覚悟を決めて席を立つ。

「あやちゃ……」

しかし、私が話しかける前に、あやちゃんはみうちちゃんとかおりちゃんに捉まった。

「あや、昼ごはん一緒に食べようよ」

「私、今日ね、あやのためにいいもの作ってきたんだ」

かおりちゃんが手に持っていたのは、牛乳パック。それを、ニヤニヤしながらみうちちゃんとかおりちゃんをあやちゃんの前に突き出した。先生はおらず、クラスメイトも遠巻きに見ているだけだ。

「なに、これ」

「あやのために特別に作ったんだ」

「ほら、はやく飲みなよ」

(なに、してるの、二人とも)

信じられなかった。ちよつと前まではあんなに仲良く遊んでたのに…。

「よくそんな子どもみたいなことができるよね」

突然あやちゃんが小さく言った一言に、わざわざとした教室は静まりかえった。それは、二人を怒らせるには十分だった。

「っつ！ あんたこそ調子にのってんじゃないわよ！」

あやちゃんの顔にみうちちゃんの手が当たるその時。

バシッ！

「え…、ひな…?」

無意識のうちに、私はあやちゃんの前に立

ちはだかっていた。

頬にぶい痛みがはしる。次の瞬間、私は頭に血が上るのが分かった。

「二人とも…もうやめてよ…」

それでも強く言えない私は、やっぱり弱いんだらう。

7

それから先生がやってきて、私たちは五時間目のあいだ中、詳しく話を聞かれた。そのときに、あやちゃんへのいじめについても話した。最後のほうになるとみうちちゃんとかおりちゃんは顔がグシャグシャになるくらい泣いていた。

でも、あやちゃんは最後まで背筋を伸ばして堂々としていた。横に座っていた私は、かっこいいなと思うと同時に、ホツとして涙がこぼれそうになった。

話が終わると、帰る時間だった。

「先生、さようなら！」

「西本さん、本当にごめんね。先生、気づいてあげられなくて」

「気にしないでください。先生が悪いんじゃないんですから」

「ありがとう。優しいね」

「いえいえ。じゃ、さようなら！」

「さようなら」

私は教室を出て行くあやちゃんの後を追った。

「あやちゃん！」

昇降口で声をかけた。あやちゃんは一瞬ビクツとしたが、ゆっくりとこちらを振り返った。

「ひな…」

逆光で表情がよく見えない。私が言葉を発する前に、あやちゃんはかけだした。

「あやちゃん！」

急いであやちゃんを追いかける。たぶんあやちゃんは私を許してはいないだろう。話をするのもいやかもしれない。

(でも、いま伝えなきゃ。私の気持ち)

8

気がつけば、夕日が反射する川の横を走っていた。まぶしくて、目がくらむ。

ふいに、あやちゃんの姿が視界から消えた。「！」

どうやら転んでしまったらしく、道路から外れた草むらの中で、あやちゃんはランドセルを背負ったままうずくまっていた。

「大丈夫？」

急いで携帯しているばんそうこうを出した。

「ひじ、出して」

私は赤くなっているあやちゃんのひじに、ばんそうこうをはった。

「これで大丈夫かな。あ、こっちもすりむいてる」

そう言って、残りのけがも手当てしていく。「ありがとう」

あやちゃんはそれだけ言ってそっぽを向いた。

「あやちゃん。そのまま聞いて」

一瞬抵抗するそぶりを見せたが、あきらめたように力が抜けたのが分かった。

「あのときは、本当にごめん。人の意見に流されて、思ってもいないこと言って。それに、あやちゃんがいじめられたときに知らないふりをして。親友なんて言ったくせに、裏切っでごめん。いつもあやちゃんに守ってもらえばかりで私からはなにもしてあげられなくて、ごめん。卑怯な私で、ごめん…」

いつの間にか、涙が音もなくこぼれて落ちていた。

「ごめんね…。ごめんね…」

最後には自分が何を言っているのかも分からなかった。

「もう、あやまらないで」

あやちゃんがポツリとこぼした。

「これ以上、あやまらないで。ひながあや

まったらあたし、苦しくなるよ。私も、ひなの話も聞かずに決めつけちゃってごめん」

あやちゃんは頭を下げた。

「それに、あたしはひなにいろんなことをしてもらったよ。このばんそうこうだって」

「え？」

「あたしと一緒にいるようになってから、ひなはいつもばんそうこう持ってたでしょ？自分は使うこと少ないのに」

「あ……」

そういえば、と思い出す。私は日常的にばんそうこうを持ち歩いているけど、それはあやちゃんがけがしたときに助けられるようにと子供ながらに考えた結果だった。

「覚えてたの？」

「もちろん。大事な親友の気づかいだよ？忘れるわけじゃないじゃん」

笑顔で言っているあやちゃんには、一生かないそうにない。このまぶしい笑顔を見て安心したのか、私の目からは涙があふれた。

「あやちゃん」

「ん？」

「私、あやちゃんと出会えてよかった」

「あたしも、ひなと出会えてよかった」

夕日が私たちを照らす。やつと言いたいこと全部、言えた。

「これからも、親友でいてくれる？」

あやちゃんの問いに、私は迷わず答えた。

「もちろん！」

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

随想部門

よりよい社会にするには

森本 紗英

夏休みのある日のことでした。妹が神戸の大きな病院に検査通院に行くことがあり、お母さんに、

「行ったら色んな経験できるから、いっしょに行こう」

と言われたので、私もいっしょに行くことにしました。

神戸の大きな病院に行くとき、電車とバスを乗りついで行きます。

そして私がバス停でバスを待っていると、バスがきて、止まりました。そしてバスに乗

ろうとしたその時、バスがまるで地面にすいこまれるようにバスが下にしずみましました。およそ十センチくらいしずみましました。私はとてもびっくりしてパンクしてしまっただのかなと思ひ、お母さんに、

「なんでバスがあんなにしずんだん？」と聞くと、

「車いすの人や足が悪い高れい者のためにバスをひくくするんよ。みんなが、幸せに平等に生活できるように、社会が色々少しづつ力をつくしているんやで。別にパンクしたわけちがうよ」

と教えてくれました。

私はその後、家に帰って、あのバスの他になにがあるのか考えました。

(そういえば、点字ブロックも目の不自由な人のためにあるなあ。てすりもその内に入るし、あと駅で流れる発着時の音楽とかも、目の不自由な人にはありがたいだろうなあ。あと、盲導犬が店などに入ってもいいところの

マークはよく見かけるし。)

と、意外と考えてみると、けっこうくふう
されているものがあります。

私は、こんなにたくさんのくふうされている
社会になっっているなんて気がつきませんで
した。あのお母さんの「色んな経験ができる
から：」の言葉の意味を、実感しました。一
歩外にでてみたら、色んな人が安全で安心の
できるどんな人でも住みよい社会をつくらう
としている人たちがたくさんいて、その人た
ちは、とってもすごいと思いました。

私は、これからは老人に席をゆずってあげ
たり、にんぷさんにはおもしろい荷物をもっ
たりあげたりして、よりよい社会に少し
でも近づけることが大切だと思いました。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

詩部門

大丈夫のリボン

森本 宝乃実

私の心の中には、大丈夫のリボンが何本か、しまつてあるよ。

そのリボンをつかう時は友だちが泣いている時に心の中から、そつととり出して泣いている友だちにむすんであげるよ。

「どうしたの？大丈夫？」

そう言いながらうすいピンク色のリボンでやさしくむすんであげるよ。

そうすると友だちは泣きやんでニッコリわらうよ。

「うん。大丈夫」

よかった。よかった。一安心。

お父さんが、つかれている時は、うすい青色のリボンでむすんであげるよ。

「お仕ごとおつかれさま。大丈夫？」

そう言いながらうすい青色のリボンでやさしくむすんであげるよ。

そうするとお父さんはニッコリわらうよ。

「うん。大丈夫」

よかった。よかった。一安心。

教頭先生の書しやのじゅぎょうの時は、朱色のリボンで私の心をギュツと強くむすぶよ。

「一文字、一文字きれいに書きましょう。」と教頭先生が言うよ。

「はい、出きました!!」

「はい、ごうかくです」

よかった。よかった。一安心。

おばあちゃんがケガをしたよ。あら大へん!!

「大丈夫？大丈夫？」

すぐに心の中から、おばあちゃんのはだと同じ色のリボンを出してむすんであげるよ。

「早くなおりますように」

「大丈夫だよ。ありがとう」

沢山^{たくさん}リボンを使ったから心のリボンが少なくなつたよ。どうしよう。こまつたよ。

「大丈夫。大丈夫」お母さんのこえがしたよ。人に親切にできるピンク色のリボンと優しい^{やさ}気持ちの青色のリボンを足してくれたよ。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

創作童話部門

心の国のかけ橋

鈴木 聖生

「いつてきまーす」

朝六時、いつも通りの時間。今日はパラパラと雨が降る中、赤色の傘をさして家を出た。そして、まだ慣れない中いつも通りの電車に乗り、いつもと同じ席につくと、ぬれた傘を束ねて横の手すりにかけた。

ふうつと一息ついてあたりを見回す…これだけ朝早くだと、車内のお客さんは、いつもと同じ決まったメンバーだ。新聞を熱心に読むおじさんに、イヤホンを耳にかけスマホをさわっているお姉さん。こっくり下を向いて

寝ているお兄さんも。車内はしーんと静かで、電車の走行音だけが鳴り響く。そして、お客さん一人一人の心の『国』は、けっして同じ車内にいる他の人の『国』に立ち入らない。いろんな人の『国』どうしが仲良くして…わけではなく、他の『国』を気にしていないようだ。全く知らんぷりするわけではないが、一歩『国』の外に出ようとすると足がすくむ。

そうこう考えている間にいつもの降車駅に着いた。空はすっかり晴れていた。

「この電車は、この駅までです。ご乗車、ありがとうございます」

広げていた参考書を閉じ、急いで荷物をまとめ、席を立った。他のお客さんも皆、忘れ物を確認しながらホームに降り、それぞれが一人一人的地へ向かう。もちろん、心の『国』も忘れずに。

「これ、忘れていますよ」

トントンと肩をたたかれ、聞きなれない声

のした方に振り向くと、そこにはいつも同じ車両で変わらず一番すみの席に座っているおばさんが：その手には私の赤色の傘があった。

「あつ、私のです。ありがとうございます」

そう受け取ると、おばさんは私の顔：目ではなく、なぜかその下の鼻や口あたりをじっと見てから、にこっとした。

「本当にありがとうございます」

もう一度、行こうとするおばさんに丁寧にお礼を言うと、おばさんはすつと耳をかたむけ、また私の顔をじっと見てからにこっとした。そして、

「どういたしまして」

そう言い残して行ってしまった。一瞬心がほんわかした後、私の顔にハテナが飛んでいる。おばさんがふり返ったとき、ゆれた髪の間から耳元に何か白っぽいものがみえた。なんだらう？でも、あのおばさんはとても美しい『国』の持ち主だ。それは、はつきりとわ

かった。そして、これから、毎朝私とおばさんの心の国はそつとつながれるかも。すつかり晴れ渡った青空を赤色の傘と共にながめると、なんだかとてもわくわくした。

けれども翌日、おばさんはいなかった。その翌日も、そのまた翌日も…。

いつものおばさんの席は、いつのまにか、新学期から新たに加わったピチつとスーツを着こなす若いお兄さんの席になっていた。

あれからずいぶん時が経ち、もうすつかり長い電車通学にも慣れた。でも、あのおばさんには、あれからずつと、一度も会えていない。

今日もその電車にゆられていた。いつもの終点に着くと、ぎごちなかった車内からも、空気も、心の国も全てがなくなる…なくなっていなかった、今日だけは。青色の傘が一本。なんだかビビツとした。思い出すものがあつた。私もあの時のおばさんのように心に美しい『国』をもつことができらるらうか。

いや、もちたい。この傘の持ち主は、確か：
あの黄色いワンピースの人だ。傘を持って、
その人を追いかけた。

「すみません。これ、ちがいますか」

声をかけたが反応がない。もう一度、真横
から、大きい声で言い直した。

「すみませーん。これ、ちがいますか」

やっとその人は振り返った。が、首をかし
げてきよとんとしている。

「ごめんなさい。人ちがいでした」

どうやらこの傘の持ち主ではなかったよう
なので、軽く頭を下げてその場から去ろうと
した。

「待って」

ずいぶん久しぶりな感じがする声だ。振り
返るとさっきの黄色いワンピースの人だっ
た。

「それ、私の傘です」

青色の傘を指さしながら言った。

「そうですか。良かったです。どうぞ」

その人は私が話しているとき、じっと私の
顔を見ていた。目線は下げて。まるであの時
のおばさんのように。そして、にこっとして
傘を受けとった。その時、ハッとした。まち
がいないと思った。その人もにこにこしてこ
ちらを見ている。そしてこう言った。

「どうもありがとう。またあなたに会えてう
れしいわ」

「先程はごめんね。私、実は、生まれつき耳
が悪くて…」

そう言いながら、耳元の白っぽいものを指
さした。補聴器だ。

「一応、これしてゐるんだけど、これだけだと
まだ少し聴こえづらくて…。私は手話も覚え
ただけど、手話を知らない人とはふつうに
お話するしかないでしょ？そのときはいつ
も、相手の口の動きもみて、音を考えながら
お話を聴くの。だから、後ろから話しかけら
れると、いつもなかなか気づけなくて。本当
にごめんなさいね。傘を届けてくれたのが、

あなたで良かったわ。ありがとう」

もしかすると、私とおばさんの心の国はずっとつながっていたのかもしれない。私とおばさんだけではない。だれかとそのだれかを助けたいと思った人の心の国はいつもつながっている。私の赤色の傘とおばさんの…あの日みた空と同じ青色の傘。これらが心の国のかげ橋になった。



